

「四十にして惑わず!」

静岡県防犯設備士生活安全協議会 会長
株式会社中部ロックセンター システム部 部長 後藤 健



「子どもの教育は、親と学校だけで成せるものではない。そのまちの大人達との関わりこそ大切だ!」。これは、青年会議所に所属していた5年前、まちの子ども達を対象とした青少年育成事業を担当した時に、先輩からいただいた言葉です。それまで自分の子供を育てる事で精一杯だと考えていましたが、改めることのできた瞬間です。学校や家庭だけでは得られない価値観、豊かな世界観や人生観を育むのは、まちの大人達の役割だと考えるようになりました。よりよい地域社会にすることは、自分の子が正しい道徳心をもち、素直でたくましく育つことに繋がります。

同じことが、防犯にも言えます。防犯とは、自分の家だけ防犯対策すればよいという考えではなく、まち全体で取り組むべき側面もあります。特に、防犯に携わる者は、まち全体の防犯を意識して取り組むべき職種であると考えています。まちの防犯は、個々の家庭でできること、警察ができる事、地域全体で取り組むべきことの積で決まると思います。前置きが長くなりました。本業は、「株式会社中部ロックセンター」という会社で、静岡県内を主に出入管理システムの提案、施工、メンテナンスを担当しています。日本一高い富士山、日本一深い駿河湾、自然豊かで都市へのアクセスもよいまち"静岡"に住む、ひとりの防犯設備士としての想いを、寄稿いたします。

防犯設備士は、2010年に取得しました。2019年春には静岡県防犯設備士生活安全協議会(以下、静防設)の会長を任命いただきました。静防設は、1999年に設立し現在正会員が20社となる団体です。主な活動内容は、静岡県警察本部より委嘱をいただいた「くらしの防犯伝導士」を、各地域の防犯講習会等へ講師として派遣しています。各種ニーズに対応した防犯情報の提供、啓蒙を年間10~20件程度、行なっております。ただし、今年度は、新型コロナの影響で講習会ができておりません。

会長職になり、他県の防犯設備士協会の方とお話しをさせていただく機会が増えて知った点は、現在9割位の地域防犯設備士協会が発展に苦慮され、運営に課題があるということと、他1割の地域防犯設備士協会は、事務局を設置して会員収入以外に防犯モデルマンションなどの収入があり運営できているという事です。

静防設は、9割の中に入りますが、どちらが良いという事ではなく、安全安心してくらせるまちに向けて、活動を続けていく必要があると考えます。当然ですが、犯罪が起きるから防犯が必要で、防犯設備の普及により犯罪が減り防犯設備士団体を必要としない、防犯設備士が衰退するまちこそ、ぐらしやすい良いまちとなり、犯罪件数が減少して静防設の解散こそが、終着点ではないかと思います。

しかし現状は、警察庁の直近の統計資料によると、都道府県別刑法犯の認知件数が、1東京、2大阪、3埼玉、静岡は11番目に刑法犯の多い県となります。これは、前向きに取り組まなければならない犯罪件数であると承知しております。

全国的に空き巣や窃盗などの物理的な犯罪は減少傾向で、情報技術を悪用した犯罪が増え、特殊詐欺が年々増加していることはご承知の通りです。防犯設備士としては、自治会などから講演させていただく機会があっても、これまでの物理的な防犯に特化しているメンバーでは、ニーズがずれてきているように考えています。防犯設備士としては、これまでの物理的な防犯に特化しているメンバーでは、対応が難しくなってきている課題があります。今、社会で求められているのは、防犯設備のアドバイザーより、サイバー防犯のアドバイザーです。防犯設備士の進むべきみちは、住宅の防犯を対象にするよりも、物理的なセキュリティを求められる企業をターゲットにした方が、防犯設備士の力が發揮できるかもしれません。つまりところ、静防設の進むべき道を模索している状況です。

生まれ育った大好きな静岡が、よりよいまちになるよう、自ら率先して、このまちを本気で、安心して暮らせるまちにするために、できることを見極めて活動していくたいと考えております。防犯設備士として、ただ社業に向こうだけでなく、高いモチベーションをもって利他の心でしなやかに、微力ながら「防犯設備士」の責務を果たしていきたいと考えております。